

＜書 評＞

Jacob S. Birnbaum 著

The Musculoskeletal Manual

篠崎直子（自治医大リハ作業療法士）

「骨折・脱臼などの外傷および RA など筋骨系に影響を及ぼす疾患に関しては、幾多の優れた著書、手引きがある。しかし、primary care に携わる医師は、そこには記載されていないような様々の筋骨の complaints の治療に相当の時間を費しているものである。医学教育面においては、卒前卒後を問わず、その辺のところはなおざりになっている傾向にある。さらに日常茶飯の筋骨の complaints に関する有用な書は見出し難い。本書は、それを補うべく企画したものである。」

以上は、著者が“まえがき”にて述べていることであるが、著者の意としたことを“manual”と呼ぶに

ふさわしいようによく構成されている。

診療上の基本、診断のために必要な検査、治療（これには安静と固定、運動、温熱および冷療法、理学療法、薬物療法、注射、筋弛緩、などを含むものである）について総括的に述べた後に、身体部位ごとに、complaint（疼痛、可動域制限、打撲、捻挫、他）ごとに詳しく述べている。さらに小児における筋骨の問題、スポーツ外傷、関節炎、RA、などについても触れられている。

理解を深めるために挿入された多くの図表（検査手技、治療手技、姿勢、解剖、他）は嬉しい心配りである。そしてさらに嬉しいのは、家庭

で行える治療手技、治療体操、日常における姿勢への配慮、など28にもおよぶ Patient Handout の存在である。そのままコピーして患者に渡すに十分な、簡潔明瞭なものである。残念なことに、本邦においてとなると、言葉のハンディのために、誰かの訳を待たねばならないであろうが……。

人々が健康の自己管理に、体力維持・増進に積極的に関心をもっている昨今、患者も医師も注射・薬物依存の医療から自己努力による健康の回復にも目を向けつつある昨今、リハビリテーション医学が機能回復の面だけでなく予防医学の面からも注目を浴びてきている状況、などを考慮するなら、本書はまさに今日の医学情勢にかなったものとも言えるのではないだろうか。

(A 5, 頁 378, 1982, \$ 19.95, Academic Press 刊 医学書院 洋書部取扱い)